

令和 7 年度 山形県立米沢女子短期大学 社会情報学科

学校推薦型選抜・特別選抜 小論文 出題の意図

出典 井出明『悲劇の世界遺産 ダークツーリズムから見た世界』文春新書、2021 年、pp.143－151.

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できるかを問う問題である。

設問 1

- 1) 設問の趣旨を的確にとらえているか。
- 2) 課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。
- 3) 文章を整然とまとめ上げているか。

設問 2

- 1) 設問の趣旨を的確にとらえているか。
- 2) 課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。
- 3) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
- 4) 文章を整然とまとめ上げているか。

※この「出題の意図」についての質問および照会には一切回答しません。

【問題】次の文章を読んで、後の設問 1、設問 2 に答えなさい。

東日本大震災の遺構の保存に関して、原爆ドームが引き合いに出されることはしばしばあった。原爆ドームの存在こそが、原爆の悲しみを後世に伝えるという論理である。しかしながら、このロジックは、かえって被災者の心を頑なにしてしまったケースも見られる。蓋し、「戦争と災害は違う」との主張には一理ある。さて、被災者のこの率直な意見にダークツーリズムはどう向き合うべきだろうか。

確かに、人為的な被害である戦争と、自然災害は完全には同列に捉えられない。一方、20 世紀末に、ダークツーリズムという概念が登場し、これがまたたく間に人々の心を捉えたところには、ある種の必然もある。それまで、戦争の跡を巡る War tourism^{ウォー ツーリズム}や災害の地を対象とした Disaster tourism^{ディザスター ツーリズム}、そして虐殺の地を訪ねる Genocide tourism^{ジェノサイド ツーリズム}といった旅の形態は個別に研究されていたのであるが、Dark tourism^{ダーク ツーリズム}という包括概念が提唱された背景には、その個別の事象にある種の共通性が読み取れるからであった。

自然災害と戦争を同一視は出来ないものの、肉親を失った悲しみは原因が何かを問わない。また、東日本大震災の後、各地で多くの遺族が訴訟を起こしているが、これは避難誘導のミスなど人為的な要因に基づくケースが多い。さらに、福島第一原発事故は、確かに津波災害を直接の原因としているが、潜在的に危険を有する設備が存在したことは、全くもって人の手によるわけであるし、防潮堤の高さが足りなかったのは人工物が有していた欠陥であった。

こう考えてみると、現代では自然災害と人為的な被害の間で明確な線引きをすることが難しいということにも気づく。人類が生きていく上で遭遇してしまう多種多様な悲しみを俯瞰的に捉え、その核心部分を構造的に後世に伝えようとするダークツーリズムという営為は、様々な危険に溢れた現代世界を新しい視点から考え直すための有効な方法論であろう。

もちろん、個別の災害や危難における事情をいたずらに混濁させるべきではない。ただ、戦争遺構について鑑みたとき、モノが持つ情報の伝達力を軽視することもやはり出来ない。Hiroshima と Nagasaki の原爆を検索してみても、前者において多くの検索結果が得られてしまう点は、単に「史上初」というだけでなく、象徴的な構造物が残存したこととも無縁ではない。

逆に、ポジティブなストーリーがあり、考古学的な発掘によってその存在が確定されても、構造物が存在しない場所では記憶の承継は弱くなる。「明治日本の産業革命遺産」として佐賀県において登録されている「三重津海軍所跡⁽¹⁾」は、そもそもは 19 世紀半ばにおいて先端的な造船を行っていたはずであるが、現状ではこの地はただの河川敷となっている。どんなに素晴らしい来歴を有する場所であったとしても、そのすばらしさを伝える構造物がないところでは、どうしても記憶の承継力は弱くなる。

被災地の人々に、遺構を残すべきであるという説得をする際に、すでにシンボリックな存在となっている原爆ドームを例として挙げたところで、既述の通り「それとは違う」という声が湧いてくるのであるが、三重津海軍所跡を始めとして、「何もないところ」を見せた時、モノがなくとも記憶がつながるといのはかなり難しいのだと分かってもらえる。遺構とは記憶が化体^{かたい}⁽²⁾された存在であることが、遺構の無い場所の例によって理解されるのである。(中略)

原爆ドームの今後を考えた時、この施設の世界遺産化に関しては(中略)あくまで“戦災の残骸”としての原爆ドームに遺構としての価値が認められた点については、この広島を将来を縛る方向にも働きかねないという懸念を持つ。(中略)広島という街が発展を続けているのに対し、かつて中心部の商業地帯にあった産業振興の館を、1945 年 8 月 6 日の姿にとどめ、営利活動はもちろん芸術文化活動に関しても厳しい規制をかけることが是かという議論が近年生じている。原爆ドームの近隣で牡蠣^{かき}小屋を営業して良いかとか、冬にイルミネーションを灯して良いかなど、新しい試みには必ずと言っていいほど反対が起こる。興味深いのは、政治的には「革新」と呼ばれる側が、原爆ドームをそのまま残すことに賛成し、「保守」とされる人々が、原爆ドーム周辺での新たな取組に理解を見せることが多い点である。この種の論争に関しては、戦後 70 余年を経て、原爆投下前の商業地域としての状況も含めた長いレンジで原爆ドームを見ていく必要がある。

2016 年に公開され、若者層から大きな支持を受けたアニメ映画『この世界の片隅に⁽³⁾』の冒頭部分は、商業地区として栄えていた原爆投下前のドーム周辺の中島町が描かれている。もちろん、多くの軍人も登場し、広島が巨大な軍都であったことがわかる。映画の後半では、広島に原爆が投下されたエピソードが挿入されているのだが、多くの日本人にとって広島は「原爆の街」であって、それ以前のイメージに乏しい。この映画の秀逸な点は、広島を単なる悲劇の街ではなく、繁栄の時代との連続性の中で描き出している点である。それゆえ、説教臭や押し付けがなく、鑑賞者は無理なく「幸せな生活が原爆によって破壊された」という悲劇を受け入れられる。

こうした連続性の中で地域を捉えようとする視点は、戦後の復興過程に対しても必要だろう。被爆を経験した後の広島は平和都市としてのアイデンティティを確立し、世界的な平和運動の拠点となった。この発展の歴史を鳥瞰的に眺めてこそ、この街の持つ本質的な価値が浮かび上がってくる。原爆によって吹き飛んだ街は、新たな都市計画が策定され、丹下健三の構想による平和記念公園は多くの人々の憩いの場となっている。被爆直後の広島は、放射能の影響のために数十年は人が住めないのではないかという予測もあったが、幸いなことに現実はその悲観論を打ち崩すこととなった。

現在、原爆ドームは世界遺産登録されており、その価値は「被爆遺構」という歴史的な意味付けから評価されている。一方、ドームにつながる平和記念公園を含む周辺部分は、世界遺産である原爆ドームを守るためのバッファゾーン（緩衝地帯）の指定を受けているに過ぎず、そこに独自の意義が認められているわけではない。

しかし、広島という街が持つ核心的価値は、70 年以上前の被爆の記憶だけでなく、「草木も生えない」と言われた焼け野原からの復興過程にも存在する。平和記念公園を含めたエリア一帯や、都市計画自体が世界遺産の対象となることには十分な合理性が存する。世界遺産の仕組みには見直しの手続きがあるわけで、こうした積極的な再構築は、未来志向型の新しい広島の価値を生み出すことにつながり得る。

では、どのような方策を取れば良いであろうか。これまで、原爆の悲劇は当事者の語りに重点をおき、被害者の視点からのコンテンツ設計が行われていた。ところが、残念なことではあるものの、被爆者の高齢化が進み、直接の語りを聞くことが難しくなっている。そうであるとすれば、当事者性とは別の観点から悲劇の記憶をつなぐ必要性がある。

具体的には、現状、点として世界遺産に登録されている原爆ドームを軸に、周辺の被爆遺構や、平和記念公園そのものを含めた「街づくりの復興過程」を世界遺産に追加的に登録させるべく動いたほうが良いのかもしれない。

広島が街が発展を続けている以上、原爆ドームの意味付けも進化していくはずである。その進化を肯定しない限り、現在の中高年が主体となっている平和運動は若い人たちにリーチしなくなるかもしれない。

また復興のダイナミズムの中に、地域としての広島の価値を認めようとする立場からは、より柔軟な考え方も出来るのではないだろうか。つまり、戦前から商業の街として栄えてきたこの地域と、戦後の経済発展は何ら矛盾するものではなく、『この世界の片隅に』と同様、原爆の惨禍が存在したことを街の歴史として連続的に捉えることで、「原爆とは何か？」という根源的な問いを各自の視点で主体的に考える契機になることも期待できる。こうした地域が有する連続性のダイナミズムの中で、牡蠣小屋やイルミネーションについても捉え直すこともできよう。現状、点として世界遺産に登録されている原爆ドームが存在する“ヒロシマ”を、より広角的に捉えることで、復興過程を含めた都市としての新しい価値と未来が生まれることが期待される。

そして、広島が復興過程が世界遺産登録の対象となるのであれば、それはやがて、東日本大震災を始めとする、災害からの「復興」についてもアイデアをトレースすることができる。「復興」が世界遺産になり得るという認識の下、単に点としての構造物に係る悲劇の承継ではなく、面としての広がりを持った地域イノベーションが望まれる。こうした復興のストーリーが世界遺産登録に繋がる^{つな}とすれば、各被災自治体も百年先を見据え、長期的視野に立った大きな復興の物語を考えるようになっていくであろう。

注

- (1) 三重津海軍所跡 佐賀市南東部にある佐賀藩の海軍養成所およびボイラー製造所跡。開設は 1858 年。1865 年には国産初の蒸気船を建造した。
- (2) 化体^{かたい} 形を変えて他のものになること。
- (3) 『この世界の片隅に』 片渕須直監督。2016 年に公開された長編アニメーション映画。

出典 井出明『悲劇の世界遺産 ダークツーリズムから見た世界』文春新書、2021 年、一部改変。

設問 1 下線部について、著者は東日本大震災の遺構の保存についてどのような考えを持っていますか。150 字以上 200 字以内でまとめなさい。

設問 2 実際に経験していない出来事について理解を深めるためにはどんな方法があるでしょうか。あなた自身の経験を具体的に挙げ、あなたの考えを 750 字以上 800 字以内で書きなさい。（ここでの出来事とは、問題文で言及されている戦争や災害といった悲惨な経験に限定しません。）